

記録と記憶

鈴木 竹志

東日本大震災の発災から早くも十年の歳月が流れた。マスコミはここぞとばかり、用意していた特集番組、特集紙面を私たちに提供した。またジャーナリズムも特集号の編集に余念なく、短歌関係の総合誌も挙って特集を組んでいた。だが、それらはすべてのメディア

のための特集であって、それ以上でもそれ以下でもない。ということは、被災地の人々にとっては、これらの特集は、自分たちに何かをもたらしてくれるものとは思えないのではなからうか。

こうした特集よりも、私は、この十年ずつと震災を詠み続けてきた塔短歌会・東北のメンバーによって出された『3653日目』（塔短歌会・東北）震災詠の記録」（『荒蝦夷』）の方に価値のあることを認めざるをえない。

特集は結局イベントであり、忘れ去られてゆくものである。しかし、この本は違う。忘れ去られてゆくことを拒否するために出されたと言ってもよいであろう。記憶は必ず薄らいでゆく。しかし、記録は後世まで残されてゆく。今は、確かに記憶が優位であろう。しか

し、必ず記録がその真価を見せる時がくる。そのことを信じて出された本と言ってもよいであろう。

この本について、梶原さい子は「はじめに」において、次のように述べている。

この本は、東日本大震災の発生した二〇一一年から毎年、塔短歌会の東北に関わるメンバーが発刊してきた九冊の冊子を、一冊にまとめたものです。

つまり、梶原さい子の「はじめに」と、巻末の高野ムツオの解説以外は、これまでに出版された九冊に掲載された内容をまとめたものである。しかし、この一冊を手にして、単に記念としての本が出来上がったとは決して思えない。一言で言えば、この本は、震災後それぞれが立ち向かわなくてはならなかった苦難の日々の記録なのである。そして、まさに記録としての存在意義がこうして一冊にまとめられたことによって、立ち上がってきたのである。「99日目」を手にした時、正直驚いた。大震災から三ヶ月ほどしか経っていない時点で、十三名がそれぞれ歌を詠み、震災

時の思いを文章にしたのである。強い意志がなくては、こうした試みは立ち上がらなかつたであろう。そして、この本を含めた十一冊が途絶えることなく出されてきたことには、敬意を表したい。継続して発行するためにどれほどの努力がなされてきたかは想像もできないほどであろう。

「99日目」と「2933日目」から一首ずつ紹介する。

黙黙と瓦礫を運ぶ遅春おそはるの熱をからだに籠もらせながら 梶原さい子

ああまだでも久々だ今日の夢の津波は透明できれいだった 逢坂みずき

もう一冊、記録となる本を紹介する。日本現代詩歌文学館がこの春出した『あの日から明日へ』である。「東日本大震災と詩歌」と題するアンソロジーと「大震災と詩歌」と題する展示の図録とが合本となっている。アンソロジーには自選作品と推薦作品がそれぞれ掲載されている。コスモスの歌人の作品も自薦、推薦共に多く掲載されているが、推薦の二首を紹介するにとどめる。

流されて家なき人も弔ひに来りて旧の住所を書けり 柏崎 驍二

あの道もあの角もなし閑上一丁目あの窓もなしあの庭もなし 斉藤 梢